

狂犬が如く

聖奈

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、家族の為に悪党となつた少女の物語

※この作品は、同作者の「Not A Hero」のリメイク版です。

# 目次

プロローグ

設定

一話 日常を踊る

二話 災厄前夜

三話 災厄

28 24 15 10 1



# プロローグ

「…あなたは、この子…と…千…を…」

「でも、博…」

声が聞こえる…。一人は姉ちゃん、そして、もう一人は…思い出せない。でも、きつと大事な人だつた気がする。

「この…と…幸せに…人間…生きて…」

「はい…絶対に…を…」

駄目だ…聞き取れないし、何だか眠い…。

「…千雪！ 千雪！」

身体が揺れる…。そして、あたしを呼ぶ声がする。耐えきれなくなり目を開ける。

「やつと、起きたか…。もう授業始まるから早く教室に戻れよ？」

「やだ」

あたしは、織斑千雪。ただの悪ガキである。

あたしはたつた今懐かしいような夢を見て起きたら、どうやら兄貴の席で膝の上で寝ていたようだ。

ちなみに、兄貴というのはさつきあたしに教室に戻るよう言つた少年。名は、織斑一夏。

「ええ!? またか…」

「仕方ないだろう…私達にこの子は手に負えん」

嫌がつた兄貴に、呆れたように言つた少女は：篠ノ之箒。あたしと兄貴の幼馴染みだ。

「しようがない…。後、一分だからな?」

「うん。兄貴大好き」

兄貴から許可を貰うと、またホツとして膝の上を堪能した。

何故、教室に戻らないかつて？何を隠そう、あたしはぼっちだからだ。

◇◇◇

俺は織斑一夏。今、小さい妹の：千雪の面倒を見ている。

うちに両親は居ない。家族は年の離れた姉と、二つ下の妹だけ。血はつながつてないけど、箒や、箒の姉である東さん、そしてその両親：篠ノ之家の皆とは昔から家族のような存在だ。よく世話になつてるし。

「どうした?」

「ああ…。ちょっと、前の事思い出しててさ…」

俺が考え事をしてると箒から声をかけられ、俺はそう答えた。

◇◇◇

一夏が思い出していた事……それは、ある日の掃除の時間の事だつた。

「やうい！男女！」

「今日は、木刀持つてないのかよー」

「…竹刀だ」

掃除の時間、箒は男子達に馬鹿にされていた。幼い頃から男のような口調や振る舞いをしていたら為、狙われたのだ。

「しゃべり方も変だもんなー」

「やーい、男女男女～」

「……」

箒はこのような事で怒る性格ではない為、沈黙したままだつた。

「うつせーなあ。暇なら帰れよ。てか、手伝え」

「はたらかざるものくうべからずー」

その時、一夏と千雪（※ぼつちなので勝手に来た）は二人で掃除をしていた。自分以外の当番はサボつて帰つてしまつたので二人でやつていた。一夏は昔より、誰かがサボれば自分がやる。そんな少年だつた。

「何だよ織斑、こいつの事庇うのか?」

「お前男女の味方かよ? てか、なんで妹居んだよ…」

「こいつ、男女の事好きなんじやね?」

男子達は、一夏の事もからかい始めた。

「掃除の邪魔だ。手伝わないならあっち行け」

鬱陶しそうに掃除を続ける一夏に男子達はさらに絡んだ。ちなみに、千雪はちりとりに溜まつたゴミを捨てに行っていた。

「ふつ。何真面目に掃除してんだか…」

「バカじやねーの…ぐつ!?!」

「痛つ!」

男子の言葉に腹を立てた筈が一人の男子の胸倉を掴み、千雪がちりとりをもう一人の男子に投げつけた。

「真面目にやる事の何が悪い!! お前達のような輩よりは遙かにマシだ!」

「なまけものがえらそーなこといつてんじやねー」

筈は真面目な性格、千雪は働くのは義務という考え方からか真面目にやっている人間が不真面目な人間に馬鹿にされる事が我慢ならなかつた。

「ム、ムキになんてなつてんじやねえよ。放せ、放せよ!」

「この野郎っ！」

「ちつ、やつぱり夫婦だぜ。こいつら朝からイチャイチャしてるし。この前なんかリボンしてたしな！男女のくせに。馬鹿みてー」

箒に胸倉を掴まれ抵抗する男子、千雪に殴りかかる男子が居る中、最後の一人は箒を標的にし馬鹿にするように笑った。

「ふきつ!?」

「ぎやあつ!?

次の瞬間、男子の頬に一夏の拳が直撃し倒れ、千雪に殴りかかった男子が拳を捌かれ足をかけられ転ばされ倒れた。

「笑える？あいつがリボンしてたらおかしいのかよ。似合つてんだろうが！」

「てめーやりやがったな！」

殴られた事に腹を立てた男子と箒の手を何とか振り払った男子が二人がかりで叩きのめそうとするが、道場や千冬に鍛えられている一夏には歯が立たずあつけなくやられた。そのすぐ近くでは、千雪が男子に馬乗りになつてタコなぐりにしていた。箒は喧嘩を止める事もなく、只一夏を見ていた。その時から箒は一夏に惚れたのだ。

その後、一夏と千雪は駆けつけた教師にやり過ぎだと叱られ、その日は何もなく三人は箒の実家の道場へ行き鍛錬をしていた。

「……お前達は馬鹿だ」

「俺達は馬鹿じやねえよ」

「あたしも…」

「筈の一言に抗議するように二人は不服そうな顔をして言つた。

「あんな事をすれば後で面倒になるとは考えないのか？馬鹿にされていたのは私でお前達は無関係じやないか」

筈の言う通り後日、間違いなくやられた男子達の親が怒鳴り込んでくる事間違い無しである。

「考えねえよ。複数で嫌がらせするつてのが気に入らねえ。そんなの男がやる事じやない」

「あたしは、喧嘩がしたかつたからやつただけだし」

一夏と千雪の言葉を黙つて聞く。千雪は一夏と同じ言葉ではないが、よく見れば少し頬が赤く目を逸らしたり拳動不審であり、筈は彼女が自分以上に素直でない事を知つていた為、同じ理由だと解釈した。

「だからさ、あいつらの言つてる事なんて気にせず：前付けてたりボン似合つてるから、また付けろよ」

笑顔でそう言つた一夏に筈は顔を赤らめ彼が好きだという自覚した。

「ふんつ。付けるか付けないかは私の勝手だ！」

「ふーん。ま、良いけどさ」

特に篠の真意に気付く事もなく、一夏はそう言つた。唐変木である。  
「…あたしは付けた方が良いと思う」

「え？」

千雪が口を開いて言うと篠は意外そうに首を傾げる。

「篠は、あたしみたいにからだうごかしたり、けんかしかできないわけじやないし…顔も、いいから…その…」

「ふふ…そうか。ありがとう。だが、お前の顔は綺麗だと思うぞ」

「……!?」

篠が微笑んでそっと頭を撫でて、言うと千雪は顔を真っ赤にして俯いた。  
「篠ノ之。そういう事言うと照れるぞ、千雪は」  
「…照れてない」

一夏の援護射撃が命中し千雪を見事拗ねさせた。

「……だ」

「えつ？」

「私の名は篠だ。いい加減覚える。父も母も姉も篠ノ之では紛らわしいだろ。次からは

名前で呼べ。いいな?」

「分かったよ。じゃあ、俺の事も一夏って呼べよな」

「な、なに?」

「だから名前だよ、千雪はともかく千冬姉と俺は名字呼びじや紛らしいし、一夏って呼べよな」

お互いが自分の名前を呼ぶように言つていた。

「あ、ああ…」

「よし、簾」

「い、一夏」

あつさり一夏は名前が言えたが簾は照れながら言い少し時間が掛かつた。

「(つか、今まで名前で呼び合つてなかつたのか…?)」

その二人を見て千雪は首を傾げるばかりだつた。

◇◇◇

「なんて事もあつたよな。にしても、あの時より前は俺達そんなに仲良くなかったな…  
千雪は違つたけど」

「そうだな。まあ、あの子は結構道場の掃除とか、かなり手伝つてくれてたし私にとつて

印象が良かつたのだろう。それに、あの時より前から年上として面倒見ていたからな」  
俺が思い出話をしていると筈は相づちを打ちながら聞いてくれたし、筈も何があつた  
か思い出すように話している。筈とは昔は馬が合わなくて仲があまり良くなかった。  
「確かにそんな感じだつたな。後、俺が筈に勝ちたくてよく挑んでたな。筈は体術でよ  
く千雪に挑んでいたような…」

俺は当時、筈に剣道の試合を何度も申し込んでいたが全く勝てなかつた。今では多分、実力差はそんなにない。しかし、俺も筈も体術だけなら千雪には全く敵わない。「そうだな。もうお前には追い付かれてしまつたが…。負けたくないからな…：剣道なら勝てるのだが—

困つたように筈は言つた。實際、困るよな。妹より弱い兄から脱却しないと…。

「やっぱ、  
筈から見てもそう思うか。俺もさ…」

キンコンカンコーン

俺が続きを話そうとするとチャイムが鳴った。

「おい、チヤイムが鳴った。早く教室戻れよ?」

んあ…もうそんな時間。  
ばいばい

今まで熟睡してたようで眠そうに目を擦りながら俺の膝から降りて教室から出て行つた。頑張れ、矢部先生（千雪のクラスの担任）。

# 設定

織斑千雪

今作の主人公

小学校に入る前の記憶が欠落しており、何故か首にチョーカーのような首輪が付いており外す事が出来ない（無理矢理外そうとすると何か刺さつた物を抜こうとした時に生じる痛みが走る）横に充電キヤップが付いていて、充電出来、千冬からは定期的に充電するよう言われている。

性格はひねくれており、冷たいように見えるが意外と情に厚い所がある。しかし、本人はそれを否定し善人扱いされる事を嫌う。

恥ずかしがり屋であり、からかわれたり素直になるのが苦手。  
その事を友人からいじられる事もしばしば。

身体能力が高く、喧嘩が強い（残像を伴う、変態スウェイや走りながら建物を登つたり、人間の肉を指の握力で引きちぎつたり等）

尚、千雪は篠ノ之道場で習つた技や千冬から教わった剣術や体術は喧嘩で使おうとはしない。本人曰く「先生や姉ちゃんが教えてくれた篠ノ之流の技を喧嘩に使いたくな

い」との事。篠ノ之流の看板に泥を塗らないタイミングであれば使う。

身長が低く胸が小さいが、あまり気にしていない（全く気にしてないわけではない）一夏の真っ直ぐな所や人の良さに憧れています。

非処女。

年齢：13歳（原作開始時）

容姿：端整な顔立ちをしていて、目はつり目。左頬に小さく右斜めの方向に傷、右目に縦に切り傷があり、隻眼。

髪型：肩まで伸ばした、セミロング

身長：139cm

髪色：灰

瞳：赤色

【機体設定】

黒鋼（くろがね）

千雪の専用機。第三世代で色は黒。装甲が少なく機動力が高いが防御力が低い。

【装備】

・遠距離

ハイドラー（ショットガン）

イチイバル（エネルギーの矢を放つ弓。様々な形に変形させることが出来る）  
 ブラックローズ（バレルが二つ付いた六連装大口径リボルバー）

・近接

焰姫（刀型ブレード）：峰にジエット推進器のついた日本刀に酷似した近接ブレード。柄の部分がアクセル状になつており、捻ると噴射口から推進剤を放出する。推進剤噴射機構からは巨大な火炎が噴かれるのでそれを利用しての攻撃も可。

鬼滅（ドス型ブレード）：千雪の得意武器であるドスの形をした近接ブレード。

【单一仕様能力】

・羅刹黑夜（らせつこくや）

エネルギーの性質を変化させ、自在に操る能力。霧状にエネルギーを分散させたり事や零落白夜の再現も可能。

【その他登場人物】

織斑千冬

織斑家の長女であり、千雪と一夏の姉。

織斑家の秘密を知っているが一人には話そとしない。

今作では、家事が出来て女子力高め。束の他に友人が居るが、癖のある人物が多い為、纏め役でもあった。

身長：167cm

年齢：不明（一応東と同い年）

織斑一夏

この物語のもう一人の主人公であり、織斑家長男。千雪の兄で千冬の弟。千雪の事を心配しており、強さに憧れている。

後は、大体原作通り。

篠ノ之箒

一夏と千冬の幼馴染み。眞面目で優しい性格だが、キレると木刀で攻撃してくるやべー奴と化す（なお、ギャグシーン扱いの為補正がかかりダメージ0）融通と冗談も意外と通じる（むしろ、箒から冗談を言うことも）姉である・東の事で悩む事も何度かあつた。

一夏の事が好き。

篠ノ之東

皆、大好きマツドサイエンティスト。身内に優しく、赤の他人に冷たい。白騎士事件に関しては特に悪いとは微塵も思つておらず、「たかが、有象無象が死んだだけ」と言え

る程、他人に冷たい。友人は原作より多いが変わり者が多かつたらしい。

年齢：24歳  
身長：169cm

# 一話 日常を踊る

どうも、織斑一夏です。今、俺は猛烈に誰かに助けて欲しい。

何故なら、

「私のプリン、食べたのあんたでしょ！」

千冬姉の親友の一人である高杉大河さんと…

「だから、知らんと言ってるだろう！」

俺と千雪の自慢の姉、織斑千冬こと千冬姉が：喧嘩をしていたからだ。事の発端は千冬姉が高杉さんのプリンを勝手に食べてしまったかららしい。千冬姉がそんな事をするとは思えないけど…。

篠は顔を青くして震えており、千雪は喧嘩に混ざろうとして二人の一撃を喰らい横向きにクレーテーの上で倒れている。ちなみに、ここは篠ノ之道場の近くだ。

「とぼけんじやないわよ！ 脳筋！」

「知らんと言つたら知らん！ 低杉！」

こうして、喧嘩に至りお互い満身創夷になりながら殴り合つたりしている。

つてか、千冬姉は脳筋じやないよ高杉さん。あと、千冬姉も一歳年下の友達の身長の

事言うのやめようか。千冬姉達がデカいだけだから。

マジで、どうしたらいいんだ…。

◇◇◇

一夏が頭を悩ませてる間に喧嘩は激しくなっていく。

「ふつーつくーあーせえいツーーー」

大河は千冬の顔へと右ストレートを放ち、それが防がれると左手と右足を少し上げて力を込める。その隙に千冬は大河の腹部や顔へ拳を数発叩き込むが少しも怯まず、そして力を溜め終えると右足を下ろし強く踏み込み、左手を振り下ろしロシアンフックを千冬へと放ちそれが顔へと命中した。

「ぐつ…!?ぬうつ…！」

今の一撃により千冬は仰向けに転倒し地面をバウンドした。そして、大河は千冬の左足を掴むと空中へと放り投げ回転しながら落下する千冬へラリアットを打つた。千冬は前方へ向きを調整し、腕を交差させて攻撃を防ぎ数メートル吹き飛びながら着地した。

「次は私の番だ。ふつ！」

千冬は地面を踏み込み一気に駆けると、正拳突きの構えを取る。

(は、速い…!?)

(な、何だ!? 千冬姉がもう、高杉さんの近くに!?)

「はああああああああッ!!」

一夏と大河が驚いていると千冬は独特の震脚動作で生み出される勁力を利用して繰り出される正拳突きを大河の腹部に放っていた。

「うぐつ…!? うえ…ぐ…うう…ひつ…う」

それを諸に受けた大河は吹き飛ぶのを強く踏み込み耐え、すさまじい威力だったのか腹部を押さえてうずくまり。ポロポロと涙を流し胃の中が逆流する吐き気と痛みに歯を食いしばって耐えている。

(す、すげえ痛そう…。駆け寄りたいけど、足が竦んで動けない…)

「終わりか?」

一夏は助けに行きたかったが動く事が出来ず、千冬はそう言いながら大河の髪を掴んで持ち上げた。

「けほつ、そんなわけないでしょッ…」

「ぐつ…!」

大河は千冬の掴んでいる腕の肘間接を指で強く摘み引き、体勢を崩した所に頭突きを腹部へとかました。

「あんたに、喧嘩で負けを認めたら束やあんたと対等な親友じやなくなるじやない。分かつたかしら? バカ」

肩で息をしながら口角を釣り上げ可能な限り大河は煽つた。

「そうか。だが、私は引かんぞ? 高杉イツ!」

「千冬ッ?!」

高杉のボディブローをスウェイでかわすとタツクルを放つ。すると、大河はタツクルをガードし弾き返した。

◇◇◇

もう駄目だ。手の付けようがない。

未だに千冬姉と高杉さんは殴り合いを続いている。

それにもしても、さつきから箒の様子がおかしい。顔を青くするばかりで何も反応がない。

「な、なあ。箒、どうしたんだよ? さつきから、様子変だぞ」

俺が声をかけると箒はビクツとして俺の肩に手を勢いよく置いた。

「じ、実は…プリン食べたの私なんだッ?!」

な、なんだつて——!!?

「な、何やつてんだよ。こんな状況になっちゃつてるんだぞ！」

「この時の俺は冷静じやなかつたのか箒に少し強めに言つてしまつていた。

「だ、だが…。今謝りに行つたら、確実に…」

「おつ、そうだな」

うん。箒の言い分は分かる。誰でも命は惜しいもんな。間違つてない。プリン一個であんな激怒激闘してたらこえーよ。

「それでいいのかよ？」

あつ、千雪が起きた。起きた直後、怒つた顔で箒の事を見上げて言う。



「千冬うツ!!」

「高杉イツ!!」

千冬と大河は距離を詰め、お互いの顔に一撃を当てようとしていた。

「やめなさい」

「うわつ!?ぐつ…」

「えつ!?きやあつ…」

ある、男性が仲裁に入り二人の手を掴み投げ飛ばし、千冬と大河は地面に転がつた。

「せ、先生…」

そう…この男性の名は篠ノ之柳韻。簫と束の父親であり、千冬を始めとする、門下生達の師匠である。

「一体、何が原因で喧嘩なんてしていたんだ？いつも仲の良い君達が珍しい」

「千冬が私のプリン食べちゃつたからっ！」

「いえ、私は食べていませんっ！」

二人が食い違つた証言をすると、柳韻は困った表情をした。

◇◇◇

「今さ、姉ちやんが疑われてる。簫ちゃん、とぼけて逃げる気じやねーよな？そんな卑怯な事しないよな？」

千雪は責め立てるよう簫に言つている。

「ま、まあまあ」

「だが…」

俺が簫を庇おうとすると、それより早く簫が口を開いた。

「大丈夫だつて。今、先生も居るし」

千雪はニカツと笑うと簫の背中を押して言つた。ほんとに、大丈夫なのか…妹よ…。

「あのつ……」

「ん……？」

「どうしたの？」

「実は、プリン食べたの私なんです！」「めんなさい！」  
千冬姉と高杉さんが顔を気の抜けた表情で見合わせてる。やばい、一話目で原作キャラ死亡とかシャレにならないぞ！？

「そう。私の方こそ怖がらせてごめんなさい……。言い辛かつたでしょ？」  
高杉さんが篠の頭を撫でる。助かつたのか……？

「それはそうですけど……怒って、ないんですか？」

「怒るも何も、篠ノ之家の冷蔵庫に入れてたからこんな事になつたわけで……あと、千冬も……悪かつたわね。あんな、大騒ぎして」  
「いや、いいんだ」

「……」

「……」  
篠はホツとして、千冬姉も安堵している。

「一見落着のようだね。お昼ご飯が出来たから、さつきは呼びに来たんだ。行こう」

どうやら、柳韻さんは俺達を呼びに来てくれてたようだ。そして、俺達は食卓へと向かう。

「なあなあつ！今日は唐揚げあるツ!?先生つ」

「ああ、勿論」

千雪が若干、ソワソワしながら聞くと柳韻さんは微笑みながらそう答えた。

「よっしゃー！」

千雪は大喜びして廊下を走つて食卓へ猛ダツシユ。

「危ないぞー！」

◇◇◇

そして、あたしは走つて食卓に着いた。

「ねえー、まだあ。早く整備やりたいんだけど」

拗ねた表情でおばさんに言うピンクの混じつた紫色の髪の女が居た。この人は篠ノ之束。篠ちゃんの姉で頭がめっちゃ良い天災。

「あつ、今日はキミも食べてくんんだね。しばらく、束さんと待とうか」

正直、あたしはこの人は好きだが少し苦手だ。なんか怖い。

「うん」

と、こんなのがあたしの日常。大丈夫かこれ？

## 二話 災厄前夜

ある日、千雪は篠ノ之家に呼び出されており束の部屋の椅子に座っていた。そして、ロボットのような物が置いてあつて束は笑顔を浮かべている。

「ねえ、これさ、どう思う?」

「どうつて言われても…。凄く、大きいです…的な…?」

あまりに笑顔の束にドン引きしながらも、探るように千雪はそう答えた。

「そつか。…キミつてさ、ほんと語彙力ないよね」

「あがつ…!ぎつ、あああ…ツ…!」

束は千雪の感想を聞くと、その瞬間に表情が顔から消え去り、千雪の頭を掴んで立ち上がると近くにあつた机の角に力を入れて擦り付けた。激痛に千雪は悶絶し、痛みに声をあげた。

「うるさいよ。別にキミ、その程度じゃ怪我しないでしょ? ほら、他に感想無いの?」「あぐ…強そうとか?」

激痛に耐えながら、束が機嫌を損ねないような自分が他に感じた事を必死に考えて目をぎゅっと閉じ答えた。

「でしょ。これはね、宇宙に行く為のパワードスースでどんな平気よりも強い…イン  
フィニット・ストラトスっていうんだ。スゴいでしょ？」

「そう言わると確かに強いような…でも、デザインが何かダサい」

千雪の感想に納得したのか東は表情が笑顔に戻り、自慢するかのように言つた。

「は？」

「デカすぎて、ダサい…」

千雪のもう一つの感想に再び、笑顔が消え顔をしかめる。

「なんだア？ てめエ……」

「てか、単にあたしには合わないってだけの話だから。兄貴辺りに聞けばカツコいいって言つてくれるだろ。んじや」

キレかけている東に背を向け手を振りながら、部屋を後にした。部屋から出てからの行動は速かつた。廊下を全速力で、必死に駆けた。

立ち止まれば命は無い。とりあえず、柳韻か等の元に逃げる事…ただそれだけが助かる道だつた。

「はあ…はあ…っ…！…うおつ!？」

「ゴンツツ!!!と凄まじい轟音が先程、出た部屋から響き、それと同時に床が大きく揺れた。

「ぐ……ツ……ひえつ……」

床が揺れた事でバランスがとれず転んでしまった。そして、背後から全身が凍り付くような殺氣を感じて立ち上がるうとしても足が震えて立つ事が出来なかつた。

「キミを殺すよ?...ここで、今」

一  
あ  
・  
あ  
・  
」

全身を恐怖という名の冷気で包み込まれ、ただ震える事しか、今の千雪には出来なかつた。下腹部に湿つた熱の感触がするがそんな事を気にしている余裕はない。

一  
束

あ?  
」

低い男性の声に呼ばれると、東は殺気を抑えないままそちらを見た。そして、相手が誰か分かると顔を青ざめさせた。

「お、お父さん…。こ、これは違くてさ…い、イジメテナンカナイヨ?」  
「なら、何故焦る? 問答無用だ」

「ちょ、落ち着いてつて！ちょ待てよ！ちょ、待てよオツ！」

声の主は、筈と束の父親である・柳韻だつた。その為、束は焦り言い訳をしているが通じるハズもなく襟首を掴まれて連行された。

連行された束と柳韻が部屋に入ると同時に束の断末魔が響いた。

(…てか、あれ宇宙に行くって本当だつたのかな?まあ、良いけど。帰るか…って、下着が濡れてて気持ち悪いっ!?後で洗濯しよう)

千雪は用は済んだのと下着が湿っていた事に気付き洗濯する為にその場を後にした。

## 三話 災厄

千雪が東に I.Sを見せられてから、しばらく経つた。その時から東や高杉、千冬はあまり千雪に構つてくれなくなつた。その事に千雪は腹を立ててゐるがそうした所で状況が変わる事はない。

(姉ちゃん達、最近構つてくれない…。何なんだよ、つたく…。そんなに忙しいのか…)

「——雪！千雪つたら！」

「あ？」

「さつきから、話しかけても無反応だぞ。どうしたんだ」

「えっ、ああ。ごめん」

一夏から話し掛けられても無反応だったようで千雪は謝罪する。

「やっぱ、千冬姉達の事か？」

「うん…」

「大丈夫だつて、用事が済んだら遊んでくれるさ。きつと」

「だよな。篠ちゃんは…？」

「篠は…」

千雪が不安に苛まれていると一夏は頭を撫でながら宥める。

「今日はどんなブレンズなんだ!? イエネコか!? アムールドラゴンか!?

「……」

「……」

篝はテレビを夢中で見ながらアニメの内容が気になるようでブツブツ独り言を連発していた。その様子に一夏と千雪は軽くドン引きする。

一夏達が見ているアニメは「のけものブレンズ2」という。動物達が人の姿に変身したキャラが登場するアニメだ。一時期、流行ったアニメで続編が作られたが一期の監督が外され別物になつたらしい。

「な、なあ……篝。一期はこの前見せたけど、二期は好きか?」

「何を言う! 好きに決まつてんだろ」

篝は何を馬鹿なと言いたげに一夏の質問に答える。

「じゃあ、クルルは?」

「…………好きだ」

「何だ今のは間!?」

一夏は確信した。篝はクルル（のけものブレンズの人間キャラ）が本当は嫌いだと。（何でこうなつた）

篠ノ之家ではチャンネル権が基本的に両親にあるので（たまに譲ってくれる）、毎週見れない為、放送時間は毎日織斑家に通っていた。

筈がアニメに興味があつたので織斑家総出でアニメを布教したらのけものブレンズにドハマリし、他のアニメを見せても同じようにドハマリした。

つまり、筈は：アニメオタと化したのだ。

「あんな奴は許せんッ！私の波紋をーー」

「あつ、始まつた」

クルルへの怒りに燃え、波紋を練ろうとする筈だが千雪がOPと共に始まつたと言うと、怒りなど忘れてテレビを食い入るように見つめる。

「ジャパンビート！」

「うわ…」

千雪と一夏はOPを口ずさむ筈を生暖かい目で見つめながら、自分達もテレビを見る。

＼ウウウウウウウツwwwwwwウウウウウウウツwwwwww／＼

OPが終ると同時にJアラートが鳴り、テレビの画面にテロップが表示される。

「おい！！まだ途中だぞ！！」

「ちょ、落ち着けって」

「ツ!? な、んだ…これは…」

それに篝が怒りテレビを揺らす。一夏が宥めるが、篝は画面を直視した途端に、顔を青ざめ膝を付く。

「ど、どうしたんだ?! つ…！」

「あ…」

急に様子が変わった篝を見て驚くが、一夏と千雪もテレビを見ると顔を青くし目を見開く。

「緊急ニュースです！ 日本に向けてミサイルが発射されました!! 繰り返します、日本に向けてミサイルが発射されました!!」

ニュースのアナウンサーが焦った様子で内容を伝える。そのニュースを見て一夏達はしばらく固まっていた。千雪は思わずチャンネルを変えた。しかし、同じ内容だつた。もう一度変えようとすると一夏と篝の手に阻まれた。

「……」

一夏と篝はもう止めようと言わんばかりに震えながら千雪の方を見て首を横に振つた。

「つ…！」

千雪はリモコンを置いて画面を見つめるしかなかつた。今もミサイルが飛んでおり、

ミサイルがCGや合成ではないのは明らかだ。

「もうだめだ、おしまいだ…」

千雪は恐怖した。ミサイルが直撃したらどのように死ぬのかを。殴られた感じか、火傷したような痛みで苦しんで死ぬのかなど。

「おじさんの所に行こう…」

「待て、外に出ている間に直撃したら…！」

「でも、大人が居ないとどうしたらしいか…」

一夏は恐怖し涙を流す千雪を見ると指で拭いながら立てるかと手を取り筈に言う。しかし、筈は筈で少しでも安全な方が良いと思い、一夏に反対した。一夏は迷いながらも葛藤していた。

（俺は…どうしたら良いんだ…）

テレビにはミサイルの数は2341発と書かれている。どう考えても助かる見込みは0に近い。

「あれは…!?」

すると、テレビから驚いた声がすると一夏達はテレビを見た。なんと、そこにはミサイルを剣で落とす謎の飛行物体と銃でミサイルを撃ち落とす謎の飛行物体の存在があつた。

(何だ、あれ…凄い…。これはまるで…)

その様はまるで、テレビに出てくる悪者をやつつけるヒーローのように千雪には映つた。リポーターが何か言つてるが今の一夏達には耳から通り抜けていき分からぬ。そして、謎の飛行物体がミサイルを全て落とし終わると戦闘機や戦車が飛行物体に攻撃を仕掛けるがあつさりと擊破してしまつた。

「今のうちに行こう!」

「ああ、父さんや母さんが心配している。今なら大丈夫だ!」

筈は千雪の手を引くと篠ノ之家へ一夏と共に向かつた。

「うわっ!?

「な、なんだ!?

行く途中に巨大な影が通り過ぎて一夏達は驚く。見上げるとこには白い騎士のような飛行物体と紅い騎士のような飛行物体があつた。

「綺麗…」

「だな…」

そう呟いていると一夏と千雪の方へと何か小さく光る物が落ちてきた。

「危ねえッ!ぐああッ、つつ…うう…!」

「痛ッ…!!あ、ぐつ…」

その小さく光る物を眺めていると、一夏が守るように千雪を抱き締めると一夏の肩を貫通して、返り血が千雪や辺りに飛び散り千雪の左頬にそれが掠り鋭い痛みが二人の身体に走り二人はうずくまつた。

「千雪!? 一夏…!? しつかりしろ…！」

「一夏君!? 千雪君!?」

篠が驚くと同時に二人に駆け寄り、千雪を脇に抱えて傷の深い一夏に肩を貸して神社へ急いで向かおうとした所、柳韻も織斑家に向かおうとしていたのか気付いて駆け寄り、救急車を呼んだ。

それから、しばらくして一夏と千雪は運ばれた。

「彼は命に別状はありませんが…手術が必要かと…。彼女の方は残念ですが、傷が深くて消せそうには…」

「そんな…」

声の主は篠の母親と医者だった。

(頬について?なら、別にいいや…死にやしないんだし)

「千雪! 一夏! 大丈夫か!？」

「頬を切つただけだから平気」

「ごめん、ちゃんと守れなかつた…。俺…」

「良いんだ、お前達が無事ならば」

そんな事を思つていると千冬が病室に血相を変えて入つてきた。二人が言うと千冬は一夏と千雪を抱き締めた。その時、ミサイルの時の恐怖がぶり返して来たのか一夏と千雪は沢山泣いた。

この事件は後に、『紅白騎士事件』と呼ばれ歴史に残つた。

しかし、一夏達はまだ知らなかつた。この事件は大きな爪痕を残し、これから先に多くの人間が不幸になり世界が狂い始めたという事を。